事、しかもそれらの話を綿密な編纂と微妙な説話配列方法によって構成した事、この厖大なエネルギーを集積し得た人として、著者は今昔物語集編纂の企画者に白河法皇を想定された。これまで今昔物語集の撰者として、源隆国、鳥羽僧正覚猷、天台座主忠尋等擬せられて来たが、今回著者によって新説が提出されたわけである。従って研究者にとっては或いはとまどいを感ぜられるかもしれない。しかしこの説は単なる思いつき、直観によったのではない。一と二との研究の成果があっての事である。著者は更に本朝部の中の口がたりによって伝承されたと考えられる説話の中から六十余の人名を撰出し、それらを諸系図にてらしあわせて検討された結果、それらの人名がほとんど白河法皇、或いはその側近と目される数人の人物と濃い血縁関係にある事を実証された。但し厖大なエネルギーを集積し得た人として、必ずしも法皇以外の人であってはならないという事にはならないであろう。今後著者が、企画者として白河法皇以外ではあり得ない事を、一層明確に論証されるならばと考える。

今日まで今昔物語集関係の研究書として、坂井衡平、片寄正義、長野嘗一各氏の著書があり、説話文学研究にとって通過しなければならない関門であった。今回更に国東氏による名著が出版された事は、早大国文学会の中に説話文学の明確な分野を確定された事であり、説話文学研究史上においては一大金字塔であると共に、後学者にとっては更に研究を発展させるべき、尊い跡石となられん事を信じ、願っている。

（早稲田大学出版部刊、A5判、二四六頁、定価八〇〇円）

井上宗雄著『中世歌壇史の研究室町前期』

福田秀一

この十年ばかりの間、中古・中世の歌壇史について精力的な研究を進め、たびたび学会や誌上にその一端を発表してこられた井上氏の成果の一部が、A5判四五〇頁書き下しの大冊として刊行された。まことに欣快に堪えない。

本書は、標題通り室町前期の歌壇史の諸問題を、応永初期、応永中期、応永末期、永享期、文安・宝徳期、寛正期、文明前期、文明後期、の八章に分って精細に考察したところを本篇とし、「付録」として「堯孝・東常縁年譜」・「室町前期私家集伝本書目」・「各家・各派系図」の三を添え、「序章」として承久の変以後両統合体までの歌壇史の略述を冠したものである。前述の八期ごとに、いくつかの問題を立てて、和歌の創作・評論や歌人の古典研究・交流その他の動静とその史的意義を考察した本書の組織は、「目次」に一目瞭然であろう。又各章ごとに「要約」を付して、著者の問題とした点とその解決とが、要領よく記されている。尨大な資料を駆使し、精細に検討して荒野の中世歌壇史をみごとな美田にした本書の本質は、この「要約」を読んだだけでは摑めないが、その美しい黄金の波をスナップして行きたいという、御用とお急ぎの旅人には、これは至極ありがたい処置である。

しかし何と云っても、本書の価値と特質とは、右にも述べた尨

大な中世の記録や歌書の整理にある。資料の所在や論証の典拠或いは関連する先学の業績は、一々明記されて後進を益すること少なくないが、書中に挙げられた既刊未刊のおびただしい書籍文献を自由自在に駆使利用した著者の「眼と手と足と器械力と頭と」（後掲石田氏の評語）は、まさに感歎措く能わざ芸ところ、多少とも資料や文献の探索を心がけたことのある人なら、賞讃を惜しまないであろう。

そういう著者の精力のほんの一部の結晶が、本書である。その問題意識と処理の方法については、著者自ら「あとがき」に述べており、又本書に見られる著者の方法論とその意義や本書のとりわけ出色の部分いくつかについては、伊地知鉄男氏の「序」に既に述べられている。それに、私共の尊敬する大先達の石田吉貞氏（『国文学』昭三七・四）、著者と同年輩で専攻の近い島津忠夫氏（『和歌文学研究』第十三号、昭三七・一）、同学の杉本つとむ氏（『解釈と鑑賞』昭三七・六）等の、好意ある批評と紹介もあり、本書の評価は先刻定まって、今更私が喋々するまでもないと思われる。ただ、せっかく与えられた機会故、以下私なりの読後感を卒直に述べ、責を塞ぎたい。

前述の通り、特に圧巻の点いくつかは伊地知氏の「序」にも述べられているが、その他にも創説・卓見と覚しきものを拾おうとすれば、全巻すべてそれならざるはなく、取捨に迷う次第である。ほんの一、二例を引けば、正徹が初めて了後と歌会で会ったのがいつのことか、「正徹物語」に記するところが不明確で従来も問題にされていた。それにつき、著者は児山・荒木・伊地知氏らの説を紹介した上、最近の川添氏の『今川了後関係編年史料』に引かれた文書と、そこにも挙げられた「高野春秋編年輯録」との記述とを勘案して、応永「三年とみるべきか。」と、控え目な結論を出しておられる（頁四一）。たまたま昨年必要あって同じことを考証した私にも、これ以上の名案は出なかったし、実は途中で著者の助太刀を乞うた始末であるが、その際の経験から考えても、この簡単な結論とそれを導く僅か数行の論述にも、著者は能う限りの力を尽し、従ってそこには大変な努力の籠っていることがわかり、それだけにその結論には安心して耳を傾けられるのである。

こんな例は随所にある。又、了俊であるが、その歿年についても、「応永廿七年八月歿という事には一抹の疑問を持っている」著者は、応永廿五年以前かとする異説とその根拠（「なべさめ草」等）とを列挙した上、それらを「傾聴すべき説」として一応肯定している（頁六四）。或いは又、常縁が生前には中央の歌壇に知られる程の存在ではなく、その盛名は専ら宗祇が自己の権威を高めるために吹聴したのに因るとの説（二四頁）は、著者の持論であり、先年広島での中世文学会で、荒木・久松・小島三大家をいささか動揺させたところであったが、本書（二三一―二四二・二九七―八・三一三―九頁）に述べられたところを読み、その少からざる資料とその的確な解釈とを前にしては、恐らく従わざるを得ないであろう。

本書から受ける恩恵は、もっと生な、新資料の教示という面も大きい。「序」にもあるが、「嘉景集」異本の調査紹介（三〇四―五頁）、興味ある書目として先年来私共の仲間の関心の的となっている蓬左文庫蔵「為家卿和歌文書」の了俊奥書の翻刻（四二―三頁、序に云えば、この奥書は必ずしも読み

やすくないので、この）、彰考館蔵「歌林」の紹介（六三頁、本書は水上甲子三氏によって飜刻される飜刻はありがたい。）、内閣文庫と彰考館文庫にあるという「一禅御説」との予告があり、待望される。）の紹介（二六一―二頁、著者あたりによって、ぜひ飜刻してほしいものである。）など、恐らく劃期的なものであろう。

或いは又、神宮文庫蔵「鹿苑院殿義満公集」（五五頁、これについては『和歌文学研究』第十四号にやや詳しい紹介が載る筈。）・書陵部蔵「為尹卿集」（六〇―一頁）・書陵部その他の「別歌百首」（一〇六頁）・彰考館蔵「室町殿十番歌合」（二七七―八頁）・同「十二番歌合」（二七八―九頁）・京大図書館蔵「文明十三年三月十八日歌合」（三〇―一頁）・尊経閣蔵正徹・心敬らの「歌合」（三三〇―一頁）等々の歌書の発掘とか、円雅の書写相伝した歌書の列挙（一八八頁）とか、「新百人一首」の序に「小倉百人一首」の名が見えることから当時世に流布していたと推定する（二一八頁）など、創見を挙げればきりがない。史的位置づけについてもしばしば論及し、小は「前摂政家歌合」の構成とその意義（一三八―一四一頁）の如きから、大は、義尚歌壇の東山文化形成への寄与（三一五―一六頁）や文明後期における文化の地方普及と地方歌壇の簇出に戦国文化への移行を論ずる（三一六―一七頁）などに及ぶ。とにかく、どこを開いても教えられるところの多い本である。

本書が名著であり不朽の金字塔であることは、前述の通り既に明かなのであるが、それだけに一つ二つの注文もつけたくなる。その第一は、島津氏（前記書評）も一寸触れておられるように、文明年間までをもって室町前期とした意味が余り強調されていないことである。確かに、一、二の箇所（三一〇・三―六―七頁）でその点についての論が展開されており、一応の納得は行くが、序章との釣合から云っても、長享延徳以後、著者の規定する中世末期までの歌壇史を附章として略述し、室町前後期の対照とその区分の理由を、もう少し具体的に示した方がよかったのではないか。そして又、できるならば、室町前期なり中世なりの歌壇史の中世的特質或いは中世文化史ないし文学史における位置を、もう少し正面から打出して頂きたかった。尤も、この点は既に著者も十分承知していると思われる。本書の前に続く南北朝歌壇史と共に、室町後期歌壇史は一応の成稿を見ている模様で、機会さえあれば上梓されるのも遠くないであろう。それらと併せて、本書はその意義を更に増すに違いない。

次に、もう一つ本書にとって惜しまれるのは、著者の挙げたい資料が余りに多かったり、頭の回転が常人より早かったりして、論述にやや簡に過ぎてもの足りない所や、いささか誤解を招きやすいところが少しあることである。例えば、未刊の「十二番歌合」の判で、義尚は「禁制詞を指摘し、喜撰式の歌病を引き、新古今・新勅撰の古歌を引用したりして博学な所をみせている」という（二七八―九頁）が、どのような指摘・引用なのか、少しく興味を引かれ、一部でも引いて頂きたかった。又、心敬が紀伊に帰って、「三月、田井庄八王寺社に百首法楽を奉納し（中略）、五月、土地の連歌好士の求めに応じて「ささめごと」上巻の筆を執り、（中略）翌五年五月には改訂を施している」とある（一八九頁）が、この部分の記述だけから、これを寛正四―五年のことと知るのは、少し骨が折れる。或いは又、文明十一年実隆と親長とが別々に「野守鏡」を校訂したかに読みとれる（二六八頁）が、「実隆公記」と「野守鏡」の奥書と、それに大東急記念文庫蔵「禁裡御蔵書目録」をも参考ま

でに見ると、親長が書写した「野守鏡」に実隆が不審紙を注したものと分る。「伏見宮記録文書」と書陵部蔵伏見宮本との関係（三九・六六―七頁）も少し分りにくい。但し、こういうところはごく僅かであるし、読者が少し心がければよいわけで、著者を責めるには当らないが、専門外の読者のためを思い、敢えて一言しておく。文章は全体に明快で、接続詞や助詞の使い方に無造作な点の見えるのも、誤解を妨げない。

以上、冗長な言を弄したが、要するに本書が中世特に室町期の文学に関心を持つ人の必携の書であることは云うまでもなく、一読の後も永く座右において、詳細な索引を利用しつつ一種の辞書として活用されるべきものと思う。そして、著者は細かい点の補訂も気にしておられるであろうが、むしろ既に用意のある南北朝及び室町後期の歌壇史を早く上梓されて三部作を完成されると共に、他日「日本歌壇史」の大成を祈り、一層の精道と学界への貢献を願ってやまない。

（風間書房刊、定価一二〇〇円）

窪田章一郎著『窪田空穂』

村崎凡人

桜楓出版の近代短歌、人と作品シリーズの一巻として出たもので、内容は、作家研究篇、鑑賞篇、作品選、紀行篇に分かれ、これに参考文献と年譜等が添い、今日における空穂研究の集大成をなすものである。

作家研究篇では、その時々の必要な作品をふまえながら、この作品がおこったところのその背景となる伝記を、簡潔に述べており、その作品と伝記は緊密な連鎖をもったものとなっている。

私は、これが書かれているときに、著者とあったおり、宇野浩二の「文学御前会議」の文につき、章一郎氏から不満の意がのべられた。宇野は、空穂がテーブルスピーチで、何かぼそぼそといった、というふうに記しているが、その時、空穂が述べたことは、五十年前の歌集と小説とを読みかえすと、小説には見るにたえぬものも少くないが、短歌には今日も新鮮な感情がある、旨をのべたのである、と、この著で述べている。私は、宇野としては、あのとき、あの作品では、戦前戦後を通して、名だたる文学者が、みんな戦争でつかれたさまを述べたので、これは空穂に限らず、その他の作家に対しても、肩によりかかったり、遅れて退出したりしていることを述べてあるので、作品としては、一つの情趣の通ったものと思う、とのべておいった。のち、室生犀星は「我はうたへどやぶれかぶれ」であったかに、宇野が死んだことをきいたところで、宇野は最近はいい作品を書いていないといい、ただ二つだけいいのがあるとして、「文学御前会議」のことをあげている。この意見に私は同感である。宇野は決して悪意をもって、空穂を書いたのではない、と思う。ただし、宇野は斎藤茂吉に傾倒していたから、多少、観点を異にしていたかも知れぬが、あの作品の意図は別にあったと思う。しかし、章一郎氏が、この著で、あの時、空穂が述べたことを明らかに記し、宇野を論じているところは、この整然たる伝記の中の、面白い一つの起伏である。これはこれでよいと思う。